

亀齡軒斗遠の後半生：天保の風流

中野，三敏

<https://doi.org/10.15017/2332591>

出版情報：文學研究. 87, pp.23-51, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

亀齡軒斗遠の後半生

——天保の風流——

中野三敏

本稿は平成元年六月四日刊行の『奥村三雄教授
退官記念国語学論叢』に収めた拙稿「亀齡軒斗遠の前半生」を書き継いだものである。

前稿に於いては斗遠の出自を考証して、安永七年、豊後竹田藩御客屋の亭主伊東家第七代として生まれた源兵エが、文化末年頃、故あって郷国を去り、京阪に住んで松月堂古流二世亀齡軒葛野莎菜の後継者となり、文政六年四十六才でその三世となるや、早速西国、特に郷里の肥・筑・豊の国々を廻遊して、華やかな活動を展開し、盛んにその土地の文人と交りを結んで、文政十年正月、最初の百瓶図集『東肥群芳百瓶』を刊行する迄を記した。

文政十年の二月、筑紫大宰府では菅公九百二十五年忌にあたり、松月堂古流の九州探題としての地位を意識した斗遠にとって、流派の喧伝には絶好の舞台という計算が働いたことは疑いない。豊後、肥後、筑前の古連と今の社中を集めた百人百瓶を社前に陳ね、「さしてこそむかしをしのべちよかけてさくきさらぎのはなのいろく」の自詠を黒柿の額に入れて西の廻廊に掛けたことは、この後四月廿五日に書きつけた「松月堂古流生華太宰府奉納自序」と題する一文に記す所である。この百瓶を図にあらわし『筑紫百瓶』二巻として刊行したのは翌文政十一年五月のことだが、

この文政十一年には、他に『水荃百瓶』『竹田百瓶』『三十六華選相生帖』の三部も一挙に刊行して、一躍西国に於ける自他ともに許す斯道の羈者となった。『筑紫百瓶』序末に「附録」として掲げられた一文は文政十一年五月、豊筑肥四国の会頭中によって記される、『東肥一』を含めた五部全巻を通じての凡例と称すべき文章であるが、その末に

東都法眼是心軒翁が甲陽百瓶、四季百瓶、五大坊卜友翁が杜若百瓶、小篠二葉百瓶、三州吉田心應軒翁三遠瓶花凡百瓶、先師法眼莎葉翁諸国百瓶、二世五大坊双娥翁に百瓶、すべて古流開発より以来花図を著せしは五宗匠にして七百瓶なり。今我師龜齡軒宗匠は一時に五百瓶をあらはし、加之諸名家の詩歌連併及書画等を集められたる、先生(の)効推(す)てしるべし。嗟呼偉哉

という。古流開祖是心軒一露以来の五宗匠あわせて七部七百瓶の瓶花図を公にしてきたが、斗遠は一時に五部五百瓶を刊行する偉業を達成したというのである。右の文章は古流内部のことのみを記して他門に及ばないが、まさしく他門を含めても前例を見ない事柄であったことは確かである。そして斗遠のみ、このことが可能であったのは、恐らく斗遠が土地土地の裕福な町人庄屋層をその門人として抱えこむ才幹を有していたことによると考えるのが一番近からう。何故なら斗遠百瓶図は、それぞれに『東肥百瓶』は山鹿の停雲館故明、『筑紫百瓶』は博多の八千廻屋椿欣、後述する『相生帖』は竹田の洗竹菴富上といった名前が、見返しや奥附に何れも蔵版者として刻みつけられており、この人々の出資によって出来上ったものである事は明瞭である。他の二部は未だに初板本とおぼしきものを見ず、何れも書肆による求板後印本なので、確言は出来ないが、大坂本屋仲間記録によれば、天保四年に出された柏原屋に拠る求板後印の際の作者と蔵板者名は、五部共凡て龜齡軒富上(豊後)とあり、これは作者名の龜齡軒と蔵板者名の洗竹菴富上とが混同されて記録されたものと思はれ、何れにしても蔵板者は他の二部の分も富上であった可能性は大きい。肥後における松月堂古流の惣会頭である停雲館が、山鹿新町の素封家であろう事は既に前稿に述べた所である。八千廻屋については猶しらべが及ばないが、洗竹菴富上は古田氏、加島屋吉郎兵衛と称して藩の用達をつとめる豪富の人

物であり、その別荘洗竹荘（窓）には山陽や山内香雪等、京・江戸の文人墨客が訪れる度に、竹田や角田九華、高橋草坪等が案内して清遊するのを常としたような風流人でもある（「卜夜快語」「山内香雪西遊日記」等）。以て停雲館や八千廻屋についても類推すべきであろう。ともかく斗遠はこうした富裕町人の財力を背景に、文政十一年迄には西国筋におけるその地歩をすっかり固めてしまったことは確かである。

こゝで文政十一年中に開板刊行されたと思はれる四部の瓶花図集について略述しておく

一に『挿花筑紫百瓶』は大本二冊。縹色の布目表紙に金箔を散らし、桜花と紅葉を手書き風に押印するのは先述した通り『東肥群芳百瓶』も全く同じで、恐らくは亀齡軒好みであろう。見返しの意匠も、全体は『東肥群芳百瓶』と全く同じ構図で、文字や細かな模様を違えるのみ。巻頭に文政九年正月亀井昭陽の「贈謝亀齡軒主人」と題する四言の賦一丁を序として載せるが、これは既に前稿に掲出した。次に文政十年正月の七十一才瀏黙老人の和序一丁、この人に関してはよくわからぬが、巻末名録の首にある（広斗 岡 古田中務）というのがそれらしく、後述する『水荃百瓶』にも序を寄せる所を見れば、亀齡軒とは何か特別の関りのある人物らしい。次に文政八年八月の清客江芸園の題辞半丁、これも前稿に掲出したもの。次に古稀翁と署名する季鷹の和序一丁半には「吾友亀齡軒の翁、去年つくしに遊ひて豊後、肥後、筑前の古連と今の社中を集て、百人一瓶の秀花をかくゑりとゞめて筑紫百瓶と題し、都のつとに携へ、其道の人は更也、したしき友かきにも見せ侍らんに一言添よとあるに……」とあって、大宰府奉納百瓶の為の筑紫下りを去年というらしく、恐らくこの序も文政十一年であろう。その後にもその内の一項を前述した「文政十一年子五月、豊筑肥四国会頭中記」と記す凡例風の附録一丁があって、以下本文の瓶花図となる。上巻には五十三瓶、下巻には五十四瓶、合わせて百七瓶。下巻巻頭にも序あり、まづ文政十年三月青柳種磨の和序一丁半。その後には同年四月廿五日の「松月堂古流生華太宰府奉納自序」と題して、奉納のいきさつを記した自序一丁、これはやはり前

述した。下巻巻末には山陽の題言半丁を置き、その裏は八千廻屋椿
 欣の藏版記に、前稿にも述べた亀齡軒形と称する缺、花器所等を記
 し、更にその後の一丁分、瓶花図中に贊を加えた諸国文人連中四十
 名の名録を並べるのは、これこそ「専ら交リヲ儒生文人ニ求」めた
 亀齡軒の亀齡軒たる所以を示す部分であろうから、特に写真でそれ
 を示しておくことにする。流石に『筑紫百瓶』と銘うただけに、
 名儒亀井昭陽と宣長門の国学者種磨を序に並べるだけでなく、聖福
 寺、承天寺の両長老に仙厓和尚、亀井瀛洲といった名門、大賀信敏、
 松永花遁といった富商、それに大宰府の祠官大鳥居の隠居や別当延
 寿王院など、亀齡軒の交際の広さを十二分に誇示している。更
 にその後半丁、奥付代りに亀齡軒著述目録を置き、また「文政十
 一年戊子五月良辰日」の日附を入れるのが刊記のつもりでもあろう
 が、これも写真で示しておく。

浪花 龜齡軒 斗遠先生著述

神華筑紫百瓶	二米	出末
東肥群芳百瓶	二米	全
土華水堂百瓶	二米	全
抽花竹田百瓶	二米	全
岡三子宿選相若帖	一米	全
諸国二百瓶花圖	四米	近刻
瓶の若葉	二米	副々

文政十一年五月良辰日

廣斗	岡	古田中	發	晁	博	戸次	次	助
長繩	若	安田長兵衛	老	博	上村	太	壽	
角闕	岡	碧雲寺	相	今	二川	幸	之	進
嵩振	岡	牧	彈	峯	島田	平	左	衛
將鼻	京	穗井田	敷	百	博	多	聖	福
君雄	京	小原	真	平	田	窪	九	
倭守	京	一	井	氏	龍	門		
並蔭	大	村	田	春	門	男		
義天	京	龜	龍	院	龍	仙		
延壽	大	濱	池	新	部	母		
松豐	博	松	永	德	右	玉	門	
信敏	博	父	賀	池	左	門		
重名	中	津	渡	達	上	野	介	
原雀	博	笠	敷	五	郎			
華陽	奈	翁	當	坊	玲			
昂	博	草	野	三	溪	村	雄	
有草	奈	報	岡	村	要	男		
杏村	筑	前	吉	富	幸	太	夫	
叢建	查	著	大	鳥	居	隱	居	
恭臨	今	延	壽	王	院	實	應	
枕膠	祝	讀	仲	村	仁	藏		
			岸	良				
			京					
			岸	雅	樂	介		

即ち前掲の『東肥群芳百瓶』と、その構成や体裁は殆んど同じいが、内容は漸く亀齡軒らしさを發揮して、瓶花図の一一に地元博多・大宰府を主に、竹田、山鹿はもとより、彦根・京・大坂といった所の知名士の詩や歌や句賛の自筆刻をちりばめ、いやが上にも華やかさを狙った仕立となったのが本書である。

ついで『水荃百瓶』が出されたものらしい。この書については、前掲の『筑紫百瓶』巻末奥付写真にも、三番目に『生華水荃百瓶』二巻として記されており、刊行された事は疑いないが、未だにその初印本とおぼしき物を見るを得ない。但し『生花四季百瓶』と改題して『東肥群芳百瓶』『筑紫百瓶』『竹田百瓶』、それに恐らくは本書の四部を四集八冊の揃い本とし、書型を半紙本型にして京都正宝堂丁子屋源次郎が求板刊行したものがあり、その初集の乾坤二巻一冊というのが、元来は本書であるらしい。表紙、題簽、見返し、奥附等は前述した通り改題求板本の事ゆえ、初印のそれを偲ぶさすがにもならぬが、序・跋・本文等は、他の三部の場合から類推して、おゝむね初印の姿をとどめているものとみてよさそうなので、以下そのつもりで述べてみる。まづ本文丁付のすべてにわたって上部に「ミ」の一字が刻されており、これは「水荃」の略称であろう。例によって、序・跋・題字等ものものしく、上巻巻頭は文政十年八月藩儒角田九華の漢序、ついで同年七月淵黙老人の和序、そして同十一年正月寂室堅光の漢序、そして彦根の小原君雄の和序と続き、更に山陽の題辭、岸岱の題辭、季鷹の題辭を置く。無論瓶花図には今度も諸名家の歌、詩をちりばめ、大平、景樹、方朗、春門等の歌人や、竹田、伊藤鏡河等の同郷人の賛が目立つ。九華の序には「浪華亀齡軒主人嘗西游寄 逕於我藩、留止數十旬、教以 插花法」、藩中人士翕然蟻集……とあって、斗遠が竹田の出身であることすら知らないようなのは聊か解せない所。また寂室の序には「余以下与生之父二有同窓之雅上乃謁余為叙」とあるが、寂室は彦根天寧寺の開祖として知られる洞門の傑僧、豊前宇佐の出身で天保元年七十八才で没するゆえ、斗遠の父源兵衛と若年時机を並べたのはどこの寺だったものか。また小原君雄の序には「古き代しのぶ葛野主の浅茅はらつばらに真つぶさにさし教へ……」とあって、この時点で、明らかに斗遠は先師莎萊から流派の三代目を継ぐのみなら

ず、その姓をも受けつぎ、伊東を葛野に改めていることが知られる。改姓の時点は一まづ文政六年の龜齡軒襲名と同時と考えておく。

尚、寂室序中には、本書を、「寄 畠岡百瓶之図」と称し、君雄の序はその序題を「插花岡百瓶前篇序」と題する。即ち本書は元来の外題を『水荃百瓶』とし、内題を「岡百瓶前篇」と称したものらしい。そして後述する『竹田百瓶』は、やはり斗遠自序の序題に「挿華岡百瓶後篇自序」とあって、この二書は即ち『岡百瓶』の前後篇の關係にあたることがわかる。

三つめは、その「岡百瓶後篇」として出された『竹田百瓶』である。本書も初板と見做し得るものは未だ見ないが、見返しに「活華百瓶図」と題した正宝堂板と、同じく見返しに「挿華四季百瓶 貳集」と題したこれも正宝堂板と、何れも半紙本型後印本二種を見る事が出来た。後者は前掲『水荃百瓶』の後印改題本と同時に、四集八冊の揃い本として出されたものの第二集に当るもので、細部に手直しが多く、前者の方がより初板本の面影を伝えているようなので、以下前者に拠って記す。

半紙本乾坤二冊。香色正つなぎ型押し地に紺で古代模様の紋を五つ摺りつけた表紙。題簽は単枠で下巻のみ、上半を欠き「堂活花百瓶 坤」と讀める。上部の欠字は「松月」の二字か。見返しは中央に「活華百瓶図」、右上に「松月堂古流」、左下に「平安書林 正寶堂藏」。奥付は「松月堂古流插花四季百瓶 二冊／同生華水荃百瓶 二冊／同活花三十六花選 一冊／松月堂古流插花百瓶 二冊／同統插花百瓶 二冊」と並記して、その下に插花の効能を記した文章を置き、また京の菱屋正次郎他二肆、浪花二肆、江戸一肆の書肆名を連署するもの。以上は文面でも明らかな如く、後印本のものである事は言う迄もない。そして奥付の記述から、四集八冊の揃い本は、更にこの後印補改本である事は確言出来る。

巻頭は千種有功卿の「竹田生花百瓶の図に龜齡軒が歌こひければ」と題する長歌一首二丁半。次に無落款の竹図一

丁。その次藤井高尚と景樹の題歌二首半丁。菅原總長の題辭半丁。ついで岸岱の筆になる一露、莎萊、斗遠と松月堂古流三代にわたる肖像一丁半。これは斗遠の分のみ写真で掲出して置く。

同三世正統龜齡軒斗遠



帖辺りから適宜に抜き出して散りばめたものでもあろう。中に蝶菴主人の左の一篇などや、長文の風流韻事を記して、よく斗遠の趣味をも窺知させてくれる。

往余在江戶芝邸一夕訪葛因是、適其書齋見虞初新志在案頭、抽借一冊、懷之而返、途中拾寬墮地而不
自覺、返邸探之無有矣、忘然自失不知所為、達明不能合睫、詰旦有人得之路傍、送于余、余欣躍
無比、開卷觀之、首篇則女子某祭杜麗娘文也、時聞門外有賣花声、急買牡丹一枝、挿古銅餅、置之坐側、
花影下且喜且誦、即唸二句、曰、幸喜芳魂未成土、牡丹亭畔再生時、蓋托麗娘事以記一時之喜也
浪華龜齡軒主人集瓶花圖使余題斯圖、因追記旧事以贈云 蝶菴主人

次に文政十一年春、彦根清涼禪寺道鳴の漢序半丁。その後

「挿華岡百瓶後篇目序」と題する斗遠の和序一丁半。以下上卷に四十七瓶、下卷に五十三瓶、合せて百瓶。下巻卷末は菅茶山の題辭半丁、雪信の今様一首半丁。そして故易齋、輕流齋、停雲館、洗竹菴の高弟四名の肖像を半丁に収め、文政十年四月の竹田の七絶六首及びその引を跋代りに置く。百瓶図にそれぞれ詩歌の贊を散りばめることは前著と全く同様。江戸の米庵、詩仏、五山、浪花の小竹、京の岡崎鶴亭、松本愚山、その他例によって季鷹あり、江芸閣あり、何れも斗遠日常の交遊の間に求め集めた揮毫の貼込

清涼禪寺道鳴の序には「龜齡軒斗遠生余竹馬友也、絶消息三十余年、今忽來訪、山中清話數日」云々とあるが、彦根清涼寺は藩侯菩提寺であり、文政十一年の正月、藩侯御廟參の砌、斗遠が插花を献じたことは、次掲の『相生帖』中に「文政十一年子正月三日彦根於祥寿山清涼禪寺国侯御廟參之時挿之」と記した一図があつて明らかである。道鳴との三十年ぶりの再会もこの時の事だった。岡藩の当主中川久教は彦根藩主井伊直亮の弟であり、その縁での献花であらう。寂室と彦根の縁もそれ故のものかもしれない。斗遠の長文の自序は松月堂古流三世を継いで、すぐに豊後下りを果し、流派の宣揚に努めた辺りの記述は既に前稿にも引き用いたので、こゝにはその懐旧望郷の念を四季折々の竹田の山川に寄せたくだりを引く。

三の都はものかはにて、なれし古里の柴の菴こそなつかしけれ。春は門田なる清水に芹をつみ、夏は碧雲の御池の蓮をめで、秋は由作にてり増るもみち、冬は朽網山に降つもるしら雪、夕されは啼て帰る鳥か嶽の名に父母をこひ、曙は嬉しき伊豆坂のかねに人みな昔をしたひ、稲葉川いなみも果ぬ花の辺に、浅草のあさきとふか山のふかきをくみて、高千穂の峯のたかきこゝろをもたらは、插花の手業はいよゝ安く平らけく、かたむきの傾くことなく、柏原のかしこみつゝしまは、千とせ経とも あさもよし木原の山の松の葉の散うせず、正木のかつらなかくつたはり

……

いろかへぬたけたの里はさかえつゝ直なる代々のかきりしられし

卷末に置く竹田の跋は七絶六首とその引を跋に代えて斗遠の需めに応じたもので、文政十年四月に長崎の寓居梨雲居に於いて記されている。六首の内の初めの一首と引のみは、既に大正十三年の『田能村竹田全集』を初め『大風流田能村竹田』巻四、大島氏の『田能村竹田』巻三等に「跋插花瓶冊」「跋插花百瓶冊」等の題で翻字されるが、他の五首については見出し得ないので、以下に翻字する

節近清明好浣沙 朱門面々水之涯

春風到此能無意 花映佳人々映花

紫蔭黃鶯上下斜 東風吹入四娘家

一年最好暮春月 無地着愁唯着花

日漸長時深掩紗 自嫌性冷負繁華

昨朝風雨今朝病 更過明朝盡落花

初暎紅動澆窓紗 彤管支頤倒鬢鴉

換稿自傷春漸暮 閑吟已近牡丹花

昨夜東風滿水涯 殘紅零落碎餘霞

色即是空々即色 不唯妙法屬蓮花

四つめはやはり岡社中の挿花図を中心にとめた『三十六花選相老帖』である。

大本一冊で表紙は例の金箔に櫻花紅葉を散らし、題簽は単枠に「三十六花選相老帖 完」とある。見返しも『東肥』
『筑紫』の百瓶と同意匠で、中央に大題「松月亭書流 四季混雜三十六華選相生帖 全一卷」とあり、左に「梓行 洗竹菴富上」と藏
板者名を記す。全二巻は恐らくは誤刻で、題簽にもある通り一冊で完本である。

巻頭は大坂の田鶴舎村田春門の和序二丁、次に例の文政十一年五月とある例言代りの附録一丁、次に文政十年三月

異歳陰同 何以貽我懸壁竹 追懷旧時感無窮 旧時先人年六十、手迹心聲各自工 今吾半百万方加^レ四 欲^レ酬^二
雅貽奈罷癡 自今二十五年 將就木姑題歲月附鴻濛 君且插花反春風 昭陽龜井豈選

大平の歌は一一に菊と梅を詠み入れて、恐らくは本書の男女一対の插花に応じた趣向と思はれ、君雄の長歌は、題に「亀齡軒の主の弾伝へられし月琴を初めて聞めでよみて参らす長歌」とあれば、この頃既に月琴の技には十分に長じていたものらしい。次の大熊言志の歌も「このうたは亀齡のうしに月琴の曲をさつかりしときのわかれによめる也」と詞書がある。季鷹の跋は過ぎし文政六年の春、斗遠や倭文字等と共に吉野に遊んだおりの三人の詠歌を記しているのは、既に前稿に引いておいた。ともかくこの相生帖は小冊ながら斗遠の趣味や交遊を總結集した感のある華麗な出来栄を示しているものと言うべく、当時、諸流の瓶花図帖の中でも一きわ目立つ存在といえるように思う。尚、插花図中、藤袴に〈亀齡軒妹 美嘉子〉紅梅百椿に〈亀齡軒弟 清遠舎祐之〉の名が見える。

以上でようやく文政十一年迄の五部の插花図刊本についての紹介を終えたが、五部を通じて顕著な斗遠の交遊関係では、唐人も含めて地元九州の諸彦は扱置き、京では頼山陽 賀茂季鷹、大坂の篠崎小竹辺りが特に目立つ存在である。そして、以後の斗遠の活動も、まさしくその線上に浮沈する様相を示しているものといえる。

文政十二年、この年の斗遠の消息は、木崎愛吉編「頼山陽全伝」にあらわれる。即ち

七月六日 亀齡軒来見

七月二十日 亀齡軒来見「月琴弦き、かつ話し、深更まで居る」

七月二十一日 亀齡軒又、月琴を奏す

亀齡軒斗遠の後半生(中野)

七月二十九日 龜齡軒來見「季鷹に頼みくれたる扇子持参……長崎迄行くよし、郷里は豊後国とやら申す事」
と。

この年の二月、山陽は父春水十三回忌とあって広島へ帰省、そのまゝ三月には母梅颯を奉じて上京した。梅颯、この年古稀を迎えている。斗遠の頼家訪問の折は、無論梅颯も滞京中であり、木崎氏日譜に引かれる引用文はすべて、その梅颯滞京日記の一節である。斗遠は梅颯の為に周旋し、しばし月琴を弾いて、その旅情を慰めた模様である。座談にも長じていたのであろう。或いは梅颯にせがまれたものかもしれない。二十九日以降にその消息が見えぬのは、梅颯日記にいうように長崎へ向けて発足したのもあろうか。梅颯はこの年十月広島へ帰った。送別の宴には季鷹や倭文字も出ている。斗遠もこの時京阪にとどまっていたら、当然出席したに違いない。斗遠が肝煎った季鷹の扇面は無論梅颯の土産物として広島へ持帰られた筈である。

斗遠の山陽宅訪問は無論この時が初めてではあるまい。後に記す「嗜血歌」をめぐる兩人の関わりなどを見れば、斗遠はこの当代随一の聞人の身边に、しっかりと喰いついていた形跡が見出せて面白い。

尚、市島春城の『随筆頼山陽』は昭和十一年の改版に際して数項の補遺がなされているが、その内の「頼氏山陽の遺事」と題した一章中に、『三十六峰山陽外史遺墨』と題する、嘉永二年に斗遠が編刊した法帖一帖を詳しく紹介してある。その書内容の一一に關してはなお後にふれることにして、この中には月琴を通じての斗遠と山陽、梅颯との交情を物語る消息が多く含まれており、その一つに、梅颯と斗遠の連吟の和歌が記されている。

初秋のよび過る頃、龜齡ぬし訪らひ、月琴を弾、かつ下の句をうたひて、これにとのぞまれければ
その名おふ琴のしらべにひかれてや待しはつかの月も出けり

また、この帖の題辞「天倪」の二字も山陽の揮毫であるが、これは山陽が斗遠の月琴の銘として撰んだものである

旨、春城翁の説明があり、山陽の詩も引いてある。

誰提蟾華裁「土琴」 團圓影裏帶「清音」

四絃如「語語」何事「碧海青天夜々心」

龜齡主人學「月琴於清客」 幾窮「蘆底」 故作「此詩」付「之」 子成

そして、この詩には更に弘化二年に識された小竹の識語が附刻されており、それには右の語の末句は李義山の有名な嫦娥の詩の末句をその俣取り入れてある旨を述べて「子成爲「龜齡老人」詠「月琴」 結用「義山全句」 老人恐未「知」之、故爲書其末」とあるという。山陽・小竹・斗遠の交遊の一端をありのまゝにのぞかせていて面白い。春城翁は斗遠について「龜齡という人は未だ委しく知ることを得ない」といわれるのみで、多分長崎辺の人かと推定を付け加えられたにとゞまる。そしてこの帖は私自身未だに寓目し得ないので、春城翁の紹介はまことに有難いものといわねばならぬ

扱、翌年は天保と改元する。その三年の秋、斗遠は今度は挿花図ではなく、得意の月琴譜を刊行した。『花月琴譜』という。

半紙本一冊、天保二年二月十九日の清客沈萍香の跋と、同三年秋の文人公卿日野資愛の序を備え、柱刻には「龜齡琴譜」と刻する。刊記・奥付の類は見えない。初めに一越調と平調の楽譜を示し、以下「九連環」を首に十八曲の俗曲詞を連ねるのみの簡略なものだが、邦人の刊行する月琴の詞譜としては、恐らく初めてのものではあるまいか。沈萍香は本邦和歌の自作迄ある人で、山陽との交際の末、自ら山陽の門人と称した人でもあり、当時我国の文人との交遊は極めて多かった。

当時、我国で行なわれていた琴の種類には一絃の須磨琴あり、七絃の琴あり、十三絃の箏の琴あり、四絃の月琴は最も新しい流行である。一絃琴と十三絃は早く和風化して定着したが、七絃琴は幕初に槩僧東阜心越によって将来され、以後支那趣味の最先端として文人墨客の間に流行し、化政期頃迄は盛んに行なわれた。月琴は琴というよりは琵琶に近く、円形の扁平な胴に四絃をはり、特に明清俗楽の伴奏楽器として用いられた。明楽は幕初、婦化人の魏之球が長崎に伝え、四代の孫君山によって明和頃一しきり流行し、『魏氏楽器図』や『魏氏楽譜』等の刊行を見たが、その後途絶えた。代って清楽はより卑俗な、従ってそれだけ強烈な支那趣味をまき散らしながら、化政期頃から流行し始め、特に月琴はその代表的な楽器として、明治初期迄も流行する。明治十年の『月琴楽譜』序や、鍋木溪菴の『清風雅譜』跋等に拠って、その沿革を辿れば、長崎の清客に淵源しながらも、本邦の伝来には二つの流れがあり、一は文政年間、清客金琴江から禅僧遠山荷塘に伝わり、江戸の平井均卿、その娘の連山、梅園へと伝わって、連山は明治期大阪へ下り、連山派を作って大いに流行った。また一つは天保二年にやはり清客林徳健から訳士頼川春渙に、そして江戸の鍋木溪菴へと伝わり、明治期、大阪の連山派に対立して東京に勢力を張ったという。そしてこの沿革史の中には、龜齡軒斗遠の名は全く忘れ去られて、その片鱗さえ見えないのはどうしたことか。荷塘伝として既に著明な朝川善菴の「荷塘道人圭公伝碑」の中には「時又有金琴江者。善月琴。師尽伝其指法。与江芸閣、朱柳橋、李小白、周安泉諸子「交最親」という。荷塘は斗遠よりも十七才の年少。唐話学の大家としての荷塘の名は今も僅かに識者間に知られるのみの存在であるが、当時の荷塘の足跡は意外なほど斗遠と重なり合っていて、文化末年には日田にあって淡窓塾に学び、その後長崎に遊んで唐音や月琴の学習に出精し、文政七年には龜井昭陽一家と極めて親密な交わりを天保二年に没する迄持ち続けている。事柄は近年では『龜井南冥・昭陽全集』第六卷所収の「家学小言」の解題に、荒木見悟氏によって略述され、その後徳田武氏の「遠山荷塘と龜井昭陽」(明治大学教養論集・233号)にも詳しく紹介される。長崎で交遊を重ねた清客の内、江芸閣や周安泉は既に見た通り斗遠の交遊圈内にあり、昭陽、旭荘また

然り。恐らく、斗遠と荷塘自身も当然互いにその名を識り、恐らくはどこかで袖ふれ合っていた可能性は大きい。昭陽が荷塘の月琴を初めて聞いたのが文政七年五月（空石日記）という。一方文政九年八月に昭陽を訪うた斗遠は、その時月琴を弾したか否かはわからぬが、前述した通り、文政十一年の『相生帖』には彦根の小原君雄や博多の大熊言志に、文政十二年には京都の山陽宅で母刀自梅颯に月琴を弾じてみせている。前述した春城翁の紹介になる山陽の詩引には「亀齡主人学月琴於清客」とあった。『月琴楽譜』序によれば江芸閣も名手であつたらしいので、斗遠は案外芸閣辺りにその指法を授かつたのかもしれぬ。そして天保三年の『花月琴譜』の刊行を見た。とすれば本邦月琴の流伝は前記二流以外に、芸閣から斗遠に伝わり大坂に定着した流れを想定することが必要ではなからうか。猶所見の月琴譜類には嘉永四年の序を持つ江戸の大島秋琴なる人物が刊行したものもあり、これ又前記二流以外と言えそうである。これと斗遠とが如何なる関わりを持つか、これも今はまだ未詳という他はない。

七絃琴や明楽がなお文人儒生の余伎という格調を保っていたのに対し、月琴による清楽は俗楽としての度合いを強め、花柳情痴の風調の故に好まれた気配がある。それは既に老熟期に入った近世雅文壇の動向とも同調して、その間に隠見する斗遠の高級幫間ぶりが目に浮ぶようである。

巻頭日野資愛の序には「葛生近又遊長崎学月琴於清客二而帰、搦弾皆尽其秘奥、一夕来為吾弾数曲、清亮堪賞、中有以邦語演歌者、間雅可愛、亦雖得之清客二而発活潑於自己、自月琴以来可謂始有其人二也」の語がある。葛生の称は斗遠が亀齡軒二世を莎菜から継承した際に莎菜の姓葛野をも継いでいた事の證據でもある。本書も伝本の稀なものゆえ、収載された曲詞の題目のみでも記しつけておこう。

一越調で九連環、鳳陽調、算命曲、含艶曲、四節曲、漳州曲、久間。哈哈調。平調に脚魚賣、補缸、月花集、尼姑思述。三国史から碧破玉、桐城歌、雙磔翠、四不像。それに金線花の一、二、三排、銀扭絲の一、二、三排。

以上十八種、日本でも大はやりの「九連環」から「久間」「尼姑思述」などの恋情綿々たるもの、「脚魚賣」のよう

な街頭の魚屋の賣り声、三国史ものの勇ましき、情趣あふれる「金線花」「銀扭絲」等々、小冊ながら一讀瞬時に、その身は長崎の唐人屋敷か、遙か唐山市の雑踏の中にある如くに覚える読者も大勢いたに違いない。

当代きつての文人公卿日野資愛に頼んだ「花月琴譜」序撰文の日附は天保三年の秋、そして同じ秋の九月廿三日に山陽が病没する。恐らく琴譜は山陽の目には触れなかっただろう。たゞ山陽没する一と月ほど前の中秋、賞月を目論だ斗遠は、猪飼敬所と共に病床の山陽を訪れ、枕辺に月琴を弾じてその病を慰めた。山陽はその返礼のつもりか、翌日詩數篇、水墨山水二図、及び例の有名な「咯血歌」一篇を揮毫して一帖となしたものを斗遠に貽った。詩や水墨画は以前に書いておいたものかもしれないが、最初の吐血はこの年六月十二日の事ゆえ「咯血歌」の成稿は当然その後のこと、木崎氏は「全伝」に七月末のことと考証されている。山陽は少なからずこの稿は得意だったとみえて、今も自筆稿數本が伝えられているようで、或いは遺書絶筆のつもりであったかもしれない。斗遠は、それから三年後の天保六年、右の咯血歌のみを墨帖に仕立て、その入手の経緯を自跋に記して附刻し刊行した。前述の、敬所と共に病床に看月した次第は、右の跋文に拠る。木崎氏は斗遠所持の山陽自筆帖を見られたものらしく、それに篠崎小竹の次韻と弔詩が附記されている旨を「全伝」の天保三年七月廿二日の條に記しておられるが、斗遠跋を附して刊行された墨帖の方は目にされなかつたらしく、右の中秋看月云々の消息は「全伝」にも見えない。よって斗遠の自跋を翻字しておく。但し、所見の墨帖は一部のみで、しかもこの自跋部分は極めて墨付きが悪く、どうしても判讀出来ないヶ所は水田紀久氏の助力を得たことを附記する。

右咯血歌一首山陽翁病中之作也。余頃日請諸名家集各家書画帖。請翁亦久而未款。歲壬辰秋八月既望夜、翁邀敬所先生及余於三樹之樓賞月。余彈月琴數曲助興。夜半而罷。翁歡甚云。兄明日重來了前日之債。翌日日晡余訪之則一帖既作方擲筆倦甚。併小詩幾篇水墨山水二図及此歌成一帖。無間翁沒。人日請此帖。病中

所作第一合作 且既為絶筆 爭求覽者相尋無斷 余初出示以誇心 及其求者衆 已不得拒亦不勝其煩
曰 按此歌奉請 垂相公題辭 為之榻本 以博其伝 且以塞其責 亦殆好事之一瞥 到此耳

花月菜翁龜齡識

龜齡

斗遠

敬所、名は彦博。京に住んで儒を講じ、諸侯に重んじられたが、中でも津藩には賓師として寓せられた。巖垣龍溪門に学び、古義折衷の学を奉じて、こと学問に関しては嚴さを以て聞え、また生来癩癩持ちとして恐れられたが、二十歳ほど若い山陽とは極めて良く、肝胆相照らす交りを持つ。京学のこととて縉紳家との交りも多かったが、特に日野、広橋の二公に信重されたので、斗遠とは或いは日野家に関はる交りであったかもしれない。斗遠よりも一七才の年長。この頃既に耳は聾し、目は失明に近かったので、斗遠の月琴も果して聞こえていたかどうか。しかし、共に興じた病床の山陽の胸中には、四年前、同じ三本木の水西荘に母梅颯と共に聞いた曲調が、ありありと想い出されていたことであろう。

そして九月廿三日、山陽は五十三才の若さで歿した。

その廿八日、大坂に戻っていた斗遠は、山陽と莫逆の交りを結んでいた篠崎小竹の家を訪れ、例の咯血歌の自筆帖を示した。小竹はその帖中に次韵詩と悼亡詩を揮毫して斗遠に贈ったものらしいことは前述した通り、木崎氏の「全伝」七月廿二日（五一四頁）にあり、

是月（九月）廿八日、龜齡山人来、示子成病中所書詩帖。展覽愴然、因録次韵詩及悼亡之詩以相贈。聞山人將遊南紀東武。須示知子成及余者相与傷逝耳。小竹散人篠崎弼。時年五十有二

の識語を記録してある。即ち斗遠藏の名家書画帖には、山陽の筆に続いて、今又小竹の想いを籠めた筆跡が加わることになった。斗遠の南紀、江戸への旅は果して何時行なわれたのか手懸りは無いが、この書画帖が携へられたことは

間違ひあるまい。そして同じく「全伝」九月廿九日の項にはこのことについて、更に面白い小竹の手紙の一節が披露されている。小竹から山陽の主治医だった京の小石榎園宛。抜書ゆえ、その部分のみを転記すると

昨日、龜齡軒参り候而、翁病中所為写法帖一覽仕候

此漢、あつかましき奴にて、大冊をせがみ候よし。私にも催促候故、此詩（弔詩）及咯血次韻之詩を、席上にて揮写遣し候 讀至末段 被_レ致落涙候

明日をもしれぬ病人に大冊の揮毫を無理強いするなんて、厚かましいと、あきれてみせてはいるが、これ迄の斗遠と、山陽、小竹との関わりを考えれば、むしろこの「あつかましき奴」という表現には、斗遠への親しみがこめられたものと解釈出来るように思う。だからこそその場で自らも弔詩や次韻詩を揮毫したわけだろう。

天保四年の末十二月、大坂の書肆柏原屋清右衛門は、『東肥群芳百瓶』他の龜齡軒瓶花図五部を一度に求板刊行した模様である。ことは『大阪出版書籍目録』の板行願書に歴然としており、又この時の奥付、即ち「天保四年己十二月／書林 大阪心齋橋通／柏原屋清右衛門」と刻した奥付を附すものを『東肥』と『筑紫』の二部については実見した。そして右の二部は書型、表紙、題簽、見返し、内容共に文政十一年の初印本と殆んど同体裁のものゆえ、他の三部も恐らくは初板と同じ龜齡軒好みの体裁で再刊されたものと見てよい。

ついでにこゝでこれ以後の龜齡軒挿花図の後印本について述べておこう。そして更に後年、京都正宝堂丁子屋源次郎を主に、江戸の須原屋茂兵衛と、大坂の河内屋茂兵衛と同喜兵衛、京の出雲寺文次郎と菱屋正次郎の五肆を相板元とした後印本が、やはり五部共に出されたようである。実見したのは『竹田百瓶』の分のみだが、これは題簽を「松月堂活花百瓶」、見返しを「活華百瓶図」と改め、外型を半紙本型に代えて刊行されている。そしてこの手の奥付には、

松月堂古流と小書きして「挿花四季百瓶 二冊、生華水荃百瓶 二冊、活花三十六花選 一冊、挿花百瓶 二冊、同続挿花百瓶 二冊」と並記され、板元には前記の三都六肆が並んでいる。即ち『東肥』『筑紫』以下の五部を右の如く改題し、全部を半紙本型に改めて後印したものらしい。

そして、この六肆相板本には更に後印改題本があり、それは『三十六華選相生帖』の分のみを除いた残りの四部八冊を、すべて半紙本型の同体裁で、『生花四季百瓶』初集から四集の揃い本として出すもので、表紙も小菊紋の地色のみを変えたものを用いており、これは全部実見する事が出来た。右の半紙本型の二通りの後印本は、何れもその刊年を正確に認定する事が出来ないが、前者は天保四年以後、弘化、嘉永頃の刊、後者は更に遅れて明治に近い頃の刊ということになる。そして半紙本型になってからは、五部の間で、題言や序、跋等を適宜入れ変えたりした形跡が見えていて、初印本とは大分様変わりしているようである。

最後印四集揃い本の内の第三集は、本来の『東肥群芳百瓶』に当るものだが、これには所見の初印本には見えない序文が一丁加わっており、これは松月堂古流の代々と、後の家元植松家との関わりについて詳述した珍しい資料と考えるので、左に記しておく。

松月堂古流生花中興、東都是心軒法眼一露翁也。其門に四宗匠あり。第一甲府忘川亭宝和、第二京師和光庵卜友、第三浪花龜齡軒莎葉、第四伊勢鶴鳴館知二等の人々なり。是心軒は安永九年十月二日行年四十七歳にして江戸に終り、今文政十亥まで、死後より四十八年なり。其後統て宝和、知二卒す。故に京師和光菴東国三十三ヶ国を受持と定め、西三十三ヶ国は浪葉龜齡軒受持と極め、これより東西とわかれて今に連綿たり。さて又五大坊といへる名は、則是心軒法眼に叙するの時、仮に山門の五大坊となりたるなれば、これは心軒の別号なりけるを、没後卜友わたくしに奪て五大坊と号し、加之植松中納言殿を堂上の御家元と頼み、巳が権を専とす。これ皆卜友一個の計に出る所なり。元來植松殿、町尻殿同時に是心軒に御入門あって、是心軒の門人なり。後は心軒、町尻殿の猶子と成て、紫

の指貫を着せり。此一条は則ト友か上木せし生花
東向雪の屋七九の表にあり推知せよかくト友一人の了簡に出る所なれば、龜齡軒莎萊翁は生涯植松殿に詣せず、今の龜齡軒は五大坊双蛾の勧めによって、始めて植松家に詣といへども、猶莎萊翁か志を嗣て、會頭、會典、席札、并傳等龜齡軒が心の俛にす。されば植松家に等しき家元なり。今松月堂古流海内に多と雖も、植松家、龜齡軒の両家をもって古流の家元なるを、後世の人たゞ植松家のみを家元也と思ひまどひなんことを計りて、此くだりを知らしむるもの也

文政十亥年三月 西都府 綠南齋御鸞

今の御家元植松家にはちと聞づらい條りも混じるが、これも歴史の一駒としてみればまた一の資料ではあろう。

天保六年、前述した山陽の「咯血歌」を墨帖として刊行したのは、この年のことらしい。即ち、その帖の末に附刻された小竹の跋文の年記が、「天保乙未（六年）上元後一日（正月十六日）為龜齡道人書」とあるからである。巻頭に「語驚人」と大書する日野資愛の題字を置き、「吾有一腔血 其色正赤其性熱」に始まる咯血歌の自筆刻を六折、そして「壬辰夏秋之交、患咯血 群医以為難起。因作咯血歌、聊以自遺。所謂長歌當哭者也。讀者哭耶、抑咲邪三十六峰外史手録 付龜齡主人」とした引が二折あって、前引の龜齡自跋があり、その後更に小竹跋二折がある。中にいう

此咯血詩、亦数月前任筆揮写、以遺病中之無聊者、觀結末數句「可知其為戲作」矣。非絶筆也。絶筆則有「南朝正統議」一大篇。

即ち、斗遠の跋にこれを山陽の絶筆と称しているのに対し、これは戲作であって、本当の絶筆は南朝正統を論じた大作こそそれにふさわしいと、随分あけすけに斗遠の言を駁している。そしてまたそれをそのまゝ跋文として掲げる

斗遠。この辺りにも斗遠と小竹の間柄を垣間見る事が出来るような気がする。

小竹のいう南朝正統論とは、九月の九日、津へ出講の途次、見舞に立寄った敬所と、病床で南北正統について大議論に及び、慷慨の余りに書き上げたといわれるもので、『政記』に収められて有名なものである。その歿前僅かに十四日のことであつた。

天保七年の正月、斗遠はもう一人の友人、というよりは、壮年時上京以来殆んど師父の如くに交つて来た賀茂季鷹を語らつて、奇抜なとしか言い様のない書物を企て、編纂し、刊行した。名付けて『華月帖』という。

大型の折帖一帖、やゝ縦細の清朝風に仕立したのは、勿論亀齡軒好みという所、本文十四丁に及ぶ絵はすべて影絵による春画で、その間に様々にしやれのめした斗遠の文章を配する。天保七年正月の季鷹の序と、同年同月の亀齡跋文とが備わるので、刊記は無いが、刊行もまづこの頃とみてよい。そして本書はその内容故に以前から好事家の間では極めて高い評価を得ていた。しかし従来の本書に関する記述は、例外なく本書を季鷹が東下りの家土産に作ったものと解説する。竹清翁の『本の話』しかり、尾崎久弥翁の『珍書愚書』しかり。竹清翁は本書の板木の残り居ることを記して、ついでに「終日凡案に在るもの、時にのびをせでは居られず。今も古もいたづらものは絶えざりけり」といかに竹清翁らしい感想を述べておられる。久弥翁は亀齡軒を季鷹の別号として解題を記される。即ちそれほどに亀齡軒斗遠の名は耳遠いものとなつてしまつていたのである。

扱、本書は目録を和唐紙の別刷にして見返しに貼りつけてあるが、それを転記することによって、内容を概観することが出来る。

序（加茂長命）

加茂季鷹

初画

狩野縫殿介永岳

二

古画

逢心

圓山應震

笑堂

村上松堂

眼料

雅楽介岸良

可為

浮田一蕙

叶男

狩野内記永信

キ鳳

河村奇鳳

三綾

土佐左近将監光文

南柯

筑前介岸岱

気の晴

菱川清春

子真

森徹山

春三夏六

岡本豊彦

三董

土佐土佐守

此冊丙申の睦月に仕上げ、吾妻下りの家つとにせんとて、急がはしく物しつれば、かんなづかひ或麓文雜刻、校合心に任せず、たゞ成れるをよしとす。故に引続き後編出版のをり、俱に改めんとす。

と。

龜齡主人

即ち、上掲の「逢心」「笑堂」「眼科」などが、本文中の絵の落款として用いられた戯号で、その下にその実名が記されている。二枚目の「古画」とあるのは、烏帽子姿の官人が、野原で三匹の狐に誑らかされて女と思ひ挑みかゝっている図柄で、画中に「豊後国伊東某所藏之古画也 幸載之」とあれば、ほかならぬ斗遠の実家に所藏していた古画をそのまゝ、模刻したものの意であろう。絵の内容は『古今著聞集』の一場面や『小柴垣草子』の野宮灌頂巻の如き有名な古画から、先述の江芸閣の肖像かと思はれる如きまでとりどりだが、何れも猥雑にわたる所を、影画という趣向を用いる事によって、文字通り臙化して品良く仕上げた辺り、他に類を見ない。そして画師の顔ぶれも「叶奴婢之好」（狩野縫殿介）や「叶男婢喜」（狩野内記）と洒落る狩野や土佐を初め圓山派、四條派等、当時京洛の本絵師の錚々たる所を網羅して、編者の顔の広さは如実に示されている。末の識語に「吾妻下りの家づと」の文字が見えて、即ち前述の通り、本書を季鷹東下りの手土産とする説が出たわけだが、その署名は紛れもなく「亀齡主人」の朱印を用いていて、東下りの主は季鷹ではなく斗遠であることを証明している。自跋には「花月琴翁亀齡」と署名するので、この書名『華月帖』はそのまゝ、自号を用いたものに他ならない。しかし斗遠の事跡が煙滅した後世においては、これを季鷹の別号という誤解が生じたのも、無理もないことでもあった。山陽なきあとの京でこれだけの顔ぶれを集めて、これだけの遊びをやったのける人といえは、銅蛇余霞楼主人棕隠か季鷹などが最もふさわしかったに違いない。その季鷹自身が、加茂長命の戯名で、序をものしているわけだから猶のこと、右の誤解は生じ易かったのである。

絵の間に適当に配された文章も、硬軟、雅俗とりどりに散りばめられ、その大半は斗遠自身の文章のようだが、中には季鷹、景樹など京人の歌や、蜀山人、真顔等江戸の狂歌師の詠もまじえて色どりをそえる。

途中の文章一丁分を示す

奇麗ずきよるはすこぶるきたな好

亀齡軒斗遠の後半生（中野）

帆柱がたてば蒲団に波がたつ

月琴譜

紗帳裡。飄蘭麝。哨叶我肩慣把簫吹。

玉臂忙搖。金蓮高举。喃喃燕々。嘸々

鶯声。好似君瑞。過鶯娘。

吸付烟草の雲となり、居続け日和の雨となる。夜着の内、蒲団の上、一生の歎会てんとたまらぬ。

ふる里に着ては帰らぬ傾城の

小袖やよるのにしき成らむ

拈華微笑の床花は、正法眼藏の帯をとかせ、教外別伝のぶんやぶしは文字太夫もはだして逃げ、よく入らっしゃったといつては田舎弁慶のやば客をたらし、嬉しがったりがらせたり、やりくり世話しきゆめの世の中、あゝこれな

むの境界ぞや

龜齡

柳句、琴譜、和歌、和文、何でも御座れの書きぶりは龜齡というより器用と評すべきであろう。

既述した岸岱画く所の江芸閣の肖影の後には「別袖」「思芸」と題した琴詞二章を記した後に、

余初到崎陽、屢会江芸閣。見妓袖笑常在其傍。後再游、其年芸閣船不來。一日投圓山逢袖笑、話及旧事。袖笑探其篋箱、示一冊子。閱之便芸閣所手書而皆其枕席間之唱和也。為余割愛而贈。余珍藏久矣。今梓此二章以附于肖影後。

天保丙申人日 花月琴翁龜齡誌

とある。即ち詞題の「袖」は袖笑、「芸」は芸閣のこと。やはり影絵の清人は芸閣で、傍の妓女は袖笑であった。



芸閣は山陽と同庚、文政元年の山陽長崎下りの時は、折悪しく芸閣が来朝せず逢えなかったが、勿論袖笑に逢い芸閣の風采を憶ったのは文苑の佳話として残る。前述した春城翁紹介の『三十六峰山陽外史遺墨』帖中には、山陽から斗遠宛の書牘も含まれるそうで、中に「江芸閣の約束の事有之、来て居るか、いつ帰るか」と云事、御聞出しなれば急に御知らせ可被下候」等の文言が見えるよしである。即ち文政八、九年頃斗遠が長崎かその近辺に滞留中の折の書牘であろう。斗遠は山陽と芸閣の間にあって、何かととり持ち役を頼むにはうってつけの人物であったと思える。

卷末の斗遠自跋には、「此花月帖は、東都、京坂、崎陽の実事、又は尊き家々に秘置給ふ古画を、当時名高き人々の写し給へるを、桜木に上せつることは、水茎の岡本の翁、よる浪の岸の大人と共にそゝのかし給ふまゝに、吾妻くだりの家づとにせんとてかく物しつる也」云々という。こゝにもまた吾妻下りの家土産とあれば、この後、斗遠が江戸へ出たことは確かだろうが、その辺りの消息を明かにし得ない。本書初印本は絹表紙のもの。又本文中に朱摺りにした字の位置が各本毎に変わっているのと、極めて板のあれた後印本があることなどから、本書はかなりの数摺り出されていることがわかる。竹清翁のいわれる通り、板木が近年迄残っていたためであろう。

天保三年に山陽をみおくれた斗遠は、その三年後の天保六年八月、今度は年来の友竹田の死に遇う。しかも竹田の死は東上の途次、大坂で病を發し、そのまゝ没したのだから、斗遠も恐らくはその送葬にも立会ったかもしれぬ。

翌七年三月、郷里豊後の鶴崎では竹田一周忌追悼書画展観会が行なわれ、同年秋にはその目録『筆華墨香供養』一冊が刊行された。竹田の好みにならったのであろう極小本一冊の目録だが、中に斗遠は追悼和歌の部の筆頭に「大阪龜齡軒」と記される。但し他の献詠者ともども、歌そのものは記されていない。因みに『大風流田能村竹田』所収の本書の翻字には「龜龍軒」と誤まっている。

来年は斗遠も還曆を迎える年でもあった。身辺ようやく淋しさを覚えることも多かつたであろう。

天保九年から十四年にかけて、斗遠の動勢を何がしかうかがえる資料に広瀬旭荘の日記『日間瑣事備忘』がある。旭荘二十六才の天保三年六月から、没する直前の文久三年迄、三十一年間にわたって書き継いだ広汎なものだが、その天保九年十月廿三日、当時大坂住の旭荘宅を斗遠が訪ねたことは、前稿の首に記した。そしてそれが旭荘宅の初めての訪問である事は、その書きぶりによって明らかである。豊後日田の豪家広頼家は斗遠にとっては旧知の家であり、早く文化二年頃には本家南陔の家に泊ったりもして、その時六才年少の淡窓にも逢っている。弟旭荘は文化四年の出生ゆえ、この時はまだ未生以前であった。その後歿ど四十年、大坂に居を構え、文名もあがっていた旭荘と斗遠とが交りをもたなかった筈は無いのだが、ともかく旭荘宅を訪ねたのはこの時が初めてであつたらしい。旭荘は斗遠より丁度三十才の年少、あたかも季鷹と斗遠の歳ほどの差である。既にして山陽を喪い、竹田と別れた斗遠ではあつたが、尚京には、九十に近い季鷹が、また大坂には殆んど同年の小竹が残っている。そこへまたこの同郷の才子旭荘と昵近の交りを持った斗遠の身辺は、一方でまた前述した淋しさを忘れることも屢であつたに違いない。

天保九年には尚十月晦日、十一月三日、十二月三日と頻繁に訪れる。十月晦日の時は小竹とも同席した。翌十年は

五月廿五日、六月廿九日の訪問を記すが、十一年、十二年には斗遠に触れる記述は見えない。その間十二年の十月には季鷹が九十才の天寿を全うして逝った。斗遠のこと何かとこまめに周旋したことであろう。少しおいて十三年は二月二十七日、嵐山雪店に仁科白谷を訪ねた旭荘は門前で斗遠と遇会する。そして翌廿八日には斗遠の月琴を聞き、廿九日には斗遠の案内で嵯峨の清涼寺、御室の仁和寺、妙心寺を巡覽して帰る。その後十月廿七日には京より斗遠來訪を記すので、この頃は斗遠は京住であったらしい。同年十二月二十日と廿五日にも斗遠は訪れている。十四年は正月四日、十一日と訪問、十一日には森邸留守居伊島又兵衛なる者を同道している。『日間瑣事瑞忘』中の斗遠の記事はこゝで途切れる。但し彭大な日記のこと、単に此方が見落しただけの事かもしれない。斗遠は、若年とはいえ、かなりな圭角を有したらしい旭荘とも極めて親密な交りを持った模様である。生來の人柄の良さが窺いしられるように思う。

天保十五年四月十七日、今度は旭荘の兄淡窓の『懷旧樓筆記』に斗遠が日田の淡窓邸を訪れた旨の記述があらわれる事も前稿の首めに記した通りである。何度目の西国下りであったろうか。旭荘の消息は無論のこと、山陽、季鷹なき跡の京坂文人連中の評判を夜つびて語り明す斗遠と淡窓の顔が見えるようである。

天保十五年は即ち弘化元年と変わり弘化は四年を数えるが、さすがに、この辺りになると斗遠の足跡は殆んど辿れなくなる。そして次の嘉永三年、既に若干ふれた『三十六峰山陽外史遺墨』と題する遺墨帖一帖を刊行している。但し原物は未だに見得ず、市島春城著『隨筆頼山陽』の改訂版に「遺事」中の一項として引かれるのを見るのであることも既に述べた。春城翁の記述に従って、その姿をなぞってみると次の如くである。

墨帖一帖、題簽は「三十六峰山陽外史遺墨」と清人沈萍香が書いたものを用い、嘉永二年七十二翁龜齡軒の上梓する所。巻首に山陽の「天倪」の二字があり、これは龜齡の月琴の銘として撰んだもの。その月琴に題する詩二、三首

があり、その内の七絶の末には、小竹が、この詩の末尾は李義山の「嫦娥」の詩の末句をそのまま用いたものだが、龜齡老人は恐らくそのことを未だしるまいと、龜齡軒をからかった註が附刻してあり、それには弘化二年七夕前三日の年記がある。次に山陽が月琴を聴く of 四言詩があり、更に、文政十二年に母梅颺を京に迎へて琵琶湖に遊んだ折の詩と和歌があり、同じ時の七月二十日、三本木の水西荘に龜齡軒を訪れて梅颺の為に月琴を弾じた時、梅颺が書き与えた和歌一首の短冊、それに附して山陽の和歌、更にそれを見て山陽の孝に感じた日野卿の歌と続き、他にも山陽が江芸閣の動勢を龜齡軒に尋ねた手紙などが収めてあるという。

以上の内容のうち、主だったものは、既に本稿において、その該当する場所で引用し説明も加えておいたので饒言は避ける。この帖の所在のしれぬことだけが甚だ遺憾であるが致し方もない。春城翁は龜齡軒の素姓を全くはかりかね、長崎辺の人で月琴の名手だったのだらうという推測を示されたのみであったので、こゝに以上の如き龜齡軒のスケッチを提示出来たのは僅かな慰めでもある。

嘉永二年は丁度山陽の十七回忌に当る。斗遠のこの帖の刊行も恐らくは追遠の志の一端でもあつたらうか。或いは歿後益々高まる一方の山陽の文名にあやかって、その交遊を世間に誇示しようという例の癖のなせる業たらうか。この年斗遠も既に七十二才、私としては前者ととっておきたい。

因みに、沈萍香の「三十六峰山陽外史遺墨」の書を題簽に用いた板表紙の墨帖一冊が、架藏中にある事はある。しかしこの方は、中味は全く別物で、陸三品の題辭に、山陽の七絶二首を刻した、天保十三年吉田治兵衛板である。斗遠編刊のそれと如何なる関わりを持つのか。今考え及ばない。

斗遠の消息はこゝで途切れる。恐らくその歿年もさほど遠いことでもあるまい。小竹も嘉永四年、七十一才で死歿した。斗遠はそれに先立ったか、それとも更に遅れたか。それにしても幾ら文人交際が好きとはいへ、もはや身辺に

は遙かに若い人達ばかり。いっそ自分もむこうへ行つて、蓮華台上、月琴でも弾いてみんなを楽しませてあげようと思つたのかどうか、今度は一段と遠い西国下りへと腰をあげた。

『日間瑣事備忘』中の斗遠に関する記事は多治比郁夫氏の御指教に拠る。また『懐旧楼筆記』の斗遠記事も多治比氏の御指摘を得て気づき、それが斗遠跡追いの端緒となった。ここに記して謝意を申述べる。